

飛驒日より

5月、新緑の青空に大小13本の鯉のぼりが元気よく泳いでいるのどかなあぶらむの里です。通信をお手になさっている皆様にはお元気で過ごしのことと思います。

飛驒の地に生活して6年目、しかし、今年ほど春を待ちこがれたことはありません。新築なったあぶらむの宿での初めての冬、どれだけ寒くなるのか、水まわりのトラブルはおこらないか、冬明けまで薪がもつだろうか、いろんな不安をもっての冬迎えました。しかし、地球温暖化といわれる今日このごろ、大敵は寒さよりも雪にありました。1月5日から2月末まで降りに降った雪は観測史上2番目の記録となりました。一夜で腰まで積る雪、シンシンと音もなく降る日は大雪で不気味さを感じます。里の入口から宿まで70米ほどの雪かきだけで半日があっという間に過ぎて行きました。「この家は屋根に2米ほど積っても大丈夫」と片町棟梁からいわれても、周囲が雪おろしをやり始めると心配でおろさずにはられません。テニスコート二面ほどある屋根は、家中総出でおろしてもたっぷり一日はかかります。そしておろした雪の後始末、どれだけ必死に働いても「雪またじ」は一銭の収入にもなりません。この大雪で山の木々は大きな被害をうけました。沢山の木がねじ倒されています。このように雪は山に住む人に負荷を与え、下流には豊かな水をもたらします。今年はこれだけの雪が降れば都会の水不足はないと思います。

初めて迎えたあぶらむの里での冬、天も祝福してくれたのか歓迎の大雪、初めは余裕の笑顔での雪またじでしたが、次第に顔が引きつって行きました。文字通りの雪との闘い、それ故に春の訪れはこの上もない喜びです。

あぶらむの里第一期の目的は、里の建設、なかでも活動の拠点となるべき宿の建築でした。まったくの荒野に、まがりなりにも道がつき、家がたちはじめました。まだまだ手を加えなければならないところが沢山ありますが、どうか生活ができ、皆様をお迎えすることができるまでになりました。第一期の目的はある程度達成できたのではないかと考えています。

第二期目の目的は、自活とプログラムの充実にあると考えています。宿を含め、あぶらむの里のさらなる建設に関しては、まだまだ皆様のお力をお借りしなければならない状況ですが、ここで働く生活に関しては自分達でまかなって行きたく願っています。

自活に向けて私は、「人様の三倍働いて人様並に」をモットーにしています。現在のあぶらむの会の収入源は、宿の利用料（一泊二食6,500円）、教会



里での初めての冬、子供達も元気で通学

の礼拝用家具を中心とした木工品の製作、講演料、そして米や野菜の可能な限りの自給自足体制です。そのどれも最善の努力を尽し、しかも価格的にも満足をいただけるようなものとし、それら全てのささやかな利益を寄せ集めて人様並にして行きたいと考えています。いろんなところに無理があるのは承知の上です。しかし、質の良い確かなものを他よりも安価に提供して行くには、今の私にはこのような考えしかもてません。3K（きつい、きたない、危険）をきらう社会的風潮の今日、3K×3＝人様並という公式に生きるのも一つの生き方だと思っています。



（ここまで書いたところで一時中断、農業担当の女房より田の畦塗りの指示が有りました。今年も石地さんや洞、中屋さんらの協力で一反五畝の田をつくることができました。秋には750kgほどの米がとれ、宿を訪れる人々に安全でおいしいご飯を食べてもらえるのです。周囲のピチットとした美しい畦に比べ私たちのそれはただの泥盛りといった感じ。どうにか田の水がもらないようにと祈りながらの作業でした。泥だらけになり腰の痛みに耐えながら思ったことは、上述した3Kのことでした。きつい、きたない、危険を嫌うということは同時に感動、感謝、そして可能性という人間の成長に必要な根本要素である3Kも同時に捨て去ることなのだと思います。この泥田から黄金色の稲が豊かに実るように、私たちの心の豊かな成長も、とかく嫌われがちな3Kといわれるものの中から育てて行くのではないのでしょうか。そう思いながら畦塗りをしていたら、私の大嫌いな“へんべ”（蛇）が春の挨拶にやってきました。）

野村さんと囲炉裏の炭焼

◎11月末、宿建設を終えホットする間もなく、自活にむけての第一歩、教会の家具づくりを開始しました。あぶらむの会世話人代表の八代主教が監督される埼玉県志木聖母教会の礼拝用家具一式です。その仕事の圧巻は、6人掛け3mのベンチイスを30脚、それも無垢の一枚板でつくるという内容でした。古川町の山口建具工芸の山口さんと三ヶ月間、来る日も来る日も重い板の加工の日々でした。無知というか恐いもの知らずというか、注文する側もそれを受ける側も、よくもまあこんなものをつくらうといひ出したものと、つくりながらあっけにとられてしまいました。「私たちのつくるものが神様の栄光を現わすための道具となりますように」と。祈りをもって始めた仕事や、やがてあまりもの疲れにおしつぶされてしまい、グチをいったり、加工の仕方をめぐって口論になったり、「180人分の席なのに、20～30人分しかうまらなかつたらどうなるだろう」と、時には教会の将来を不安がったり（失礼しました）。ものをつくることの喜びと不安の中に長い冬も過ぎて行きました。



山口さんと教会家具づくり開始



志木聖母教会に教会家具を納品

このように、教会の礼拝用家具の請負いという初めての仕事に、タフな私の神経も多少疲れをおぼえたようです。しかし、木工の技術的なことや経営に関して、また、生きて行くということの厳しさなど、多くの学びを得たように思います。雪との闘い、家具づくり、長い冬もこのようにしてアッという間に過ぎて行きました。そして気がついてみれば、このあぶらむ通信を半年もご無沙汰していたのです。本当に申し訳ない気持ちで一杯です。

もう少し余裕を持ちたいですね。

3月初旬、一年間家族の一員として一緒に生活していたU君が帰って行きました。また数日前には三ヶ月ほど生活を共にしたK子さんも帰って行きました。彼らはあぶらむの宿における長期滞在者です。

あぶらむへ来たてのU君は、周囲の者と一言の言葉を交すこともなく、心をかたく閉ざしていました。何をたずねても「知らん」、それだけが彼の口から出る言葉でした。一ヶ月ほどしたある日、二人で重い石を持ち上げた時のことです。石はとっても正直者で、持ち上げる二人の呼吸が合っていないと、遅れた者の指をはさみ、二人のいきの合わなさを批判するのです。そのことを説明し、「一、二、三」と声をかけた私ですが返事はなし、合図のかけ声を無視して彼が先に持ち上げたため、私の指はしっかりとはさまれてしまい爪が死んでしまいました。あまりもの痛さにうめき声をあげてしまった私でした。しかし、その日から彼は仕事の時だけ最少限の言葉を口にするようになりました。日々の作業を通して、コミュニケーションの大切さを学んでいったようです。

半年ほど経つと、狼のような目がとっても素敵な笑顔に変わりました。重いものをもちあげる時など、私に軽い方をゆずり、自らすすんで重い方を持つようになりました。相変わらず言葉数は少なかったのですが、身体全体ではっきりと気持ちを表現するようになりました。あぶらむの宿完成に果たした彼の役割にはとっても大きなものがあります。そんな彼を見込んで、片町さんはじめ多くの人から求人のプロポーズがありました。

た。しかし、彼は首を横にふり続けるばかり、彼の心のある一点だけはかたく閉ざされたままでした。

あぶらむでの生活を終え、彼は家に帰ると云いました。この一年間、決して帰ろうとしなかった自分の家に帰ると云うのです。その時の彼の顔は、初めてあぶらむへ来た時のような険しい顔つきに逆もどりしており、私たちは辛い気持ちになりました。彼がそれほどまでに心を閉じてしまう原因は何なのか、このままあぶらむを去って行けば彼のこの一年間の苦労は何だったのか、私は親子三人と私たち夫婦とでの徹底的話合いを持つことにしました。

それは息も心も詰まるような重い雰囲気でした。何をたずねても首を横にふるばかり、口から出る言葉は「絶対にしゃべらん」ということだけ。あぶらむの宿建設にぶちあたったこの一年、彼は泥にまみれ、汗まみれになって必死に働きました。あんなに素晴らしい笑顔をするようになった彼が、また再び心を閉じてしまうなんて、それは私たちにとって耐えられない辛さでした。私は必死に祈りました。神の助けを祈り求めました。全員必死でした。

冬の夜も三時をまわり、もうこれまでと思った時、彼はその心の奥にあるものを出したのです。「俺はオヤジが憎い、どうしようもなく憎い。けれどもオヤジのこと尊敬しているんだ」、泣きながらはじめて心を口にしたU君、私たちも一緒に泣きました。

あぶらむを去る朝、彼は一人で帰って行きました。駅まで送ろうかという私に、歩いて行くからといいました。道に出て彼の姿が木工の作業小屋に隠れた時、「バカヤロー」という大声が3度聞こえてきました。「バカヤロー」この言葉は何を意味しているのでしょうか、誰に向けてのものなのでしょうか。私と女房の心は鉛のように重くなりました。確かに至らないことの多い私たちです。しかし何に対しても全力投球をしてきたつもりです。今はU君の人生の幸を神に祈るのみです。



待ちに待った春の訪れ

何だか重苦しい内容になってしまいました。これもあぶらむでの出来事です。共に生きることの難しさ、それ故に大切さを教えられます。

あぶらむの里は豊かな四季の表情をもったところです。どうぞ新緑のそして初夏のあぶらむへお出かけ下さい。皆様とお会いすることを心より楽しみにしております。皆様のご健康をお祈りいたします。

1991年5月 あぶらむの会代表 大郷 博

飛騨の地・あぶらむの里への

ご案内マップ

- スポーツ …… スキー場、フィールドアスレック、テニスコート、野球場
- 古い街並 …… 高山、飛騨古川
- 合掌造り …… 白川郷
- 温泉 …… 平湯、新穂高温泉、下呂温泉など

穂高

新穂高温泉



清峰寺
円空三休仏



春は桜が見事

阿多由太神社

← 飛騨古川駅



飛騨古川駅

鯉の泳ぐ堀溜り



飛騨の匠文化館

円光寺

白いカベ工務店

真泉寺



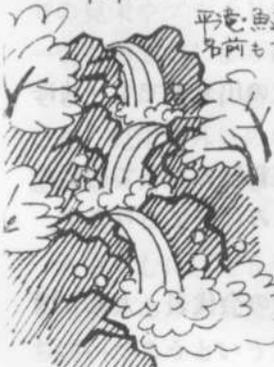
起し大鼓 (4/19)

早立自然公園

宇津江四十八滝

平滝・魚豆滝などの
名前もついでに48の滝

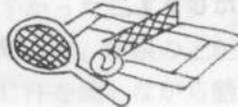
キャンプ場



展望台も



テニスコート



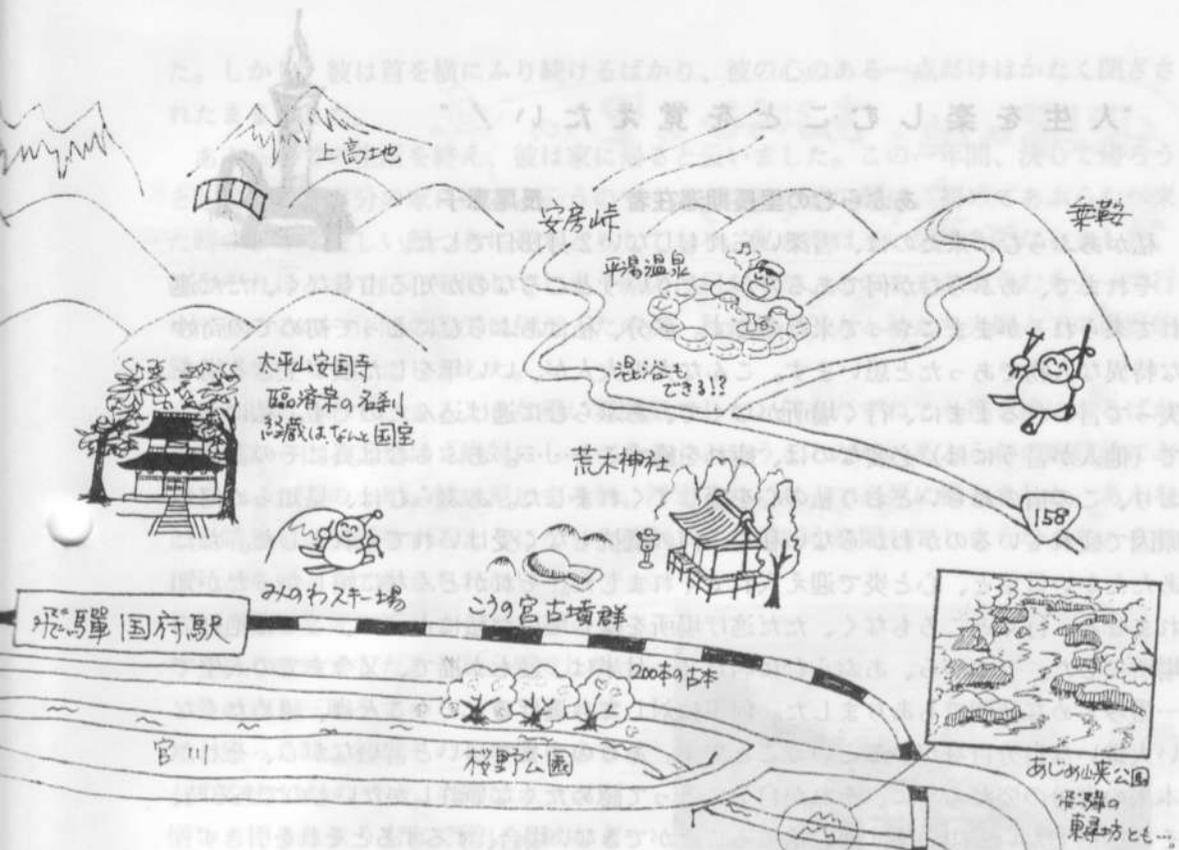
☆ ☆ 降はうな星空
♪ やがは新陳と風

大郷天童との語りいっせ
ヒキのお風呂も、おにぎり

地域の魅力満載の
人との交流も…

いっせいっせ

あぶらむの里の近くには
「21世紀に残したい自然風景」にも
数えられている宇津江四十八滝と
いくつかのレジャー施設があります。
春は新緑のもての森研谷、山菜とり
夏は星座観望やキャンプ
秋は紅葉、山菜やキノコ狩り、
冬は、氷柱の滝と楽しむ川。



交通のご案内

- < JR >
- ▶ 東京 新幹線 → 名古屋 高山本線 → 飛騨国府
 - 2時間 / 2時間30分
- < マイク > 夏期
- ▶ 東京 中央自動車道 → 岡谷JCT 長野自動車道 → 飛騨国府
 - 2時間30分 / 30分
 - ▶ 不本本IC 国道158(鈴峠) → 高山 国道41号 → 飛騨国府
 - 3時間 / 20分
 - ▶ 名古屋 国道41号 → 飛騨国府
 - 4時間
 - ▶ 大阪 名神高速 → 小牧JCT 中央自動車道 → 飛騨国府
 - 2時間 / 40分
 - ▶ 中津川IC 国道257号 → 下呂 国道41号 → 飛騨国府
 - 1時間 / 1時間30分
- 気をつけていらしてくださいね!



金蔵獅子
村と乱れ悪い獅子と
金蔵(男神)と石蔵(女神)の
協力にやらしめるよう
祭礼行事。(5月・9月)



高山の街並



“人生を楽しむことを覚えたい！”

あぶらむの里長期滞在者 長尾恵子



私があぶらむに来たのは、雪深い忘れもしない2月18日でした。

それまで、あぶらむが何であるのか、どういうところなのか知る由もなく、ただ連れて来られるがままにやって来たのです。多分、私はあぶらむにとって初めての奇妙な特異な人物であったと思います。こんな大の大人が、いい年をした娘が生きる術を失って言われるままに、行く場所がなく、あぶらむに逃げ込んだのです。私にとって（他人が言うには）必要なのは、疲れを癒すこと……。あぶらむは真にその言葉どおり、この宿のねらいどおり私の心を癒してくれました。あぶらむは、見知らぬ何が原因で疲れているのかわからない私を、何の抵抗もなく受け入れてくれました。ただあたたかい言葉と、心と炎で迎え入れてくれました。それがどんなに嬉しかったかわかりません。行くところもなく、ただ逃げ場所を探していた私にとって、ここは絶好の場所でした。ですから、あぶらむに居た2ヶ月半は、最も幸福で、又今までの人生で一番みじめな時間でもありました。何事に対しても逃げるということは、認めたくない大嫌いな自分自身がいるということです。ありのままが良いと言いながら、それが本来の自分の姿だろうに、それが自分にとって認めたくない許しがたいものである時、それを捨てたいと思いますが、捨てることができない場合、ずるずるとそれを引きずっていつまでたってもぬるま湯から出て来られないのです。それが辛いからみじめなのです。断ち切ることでできない自分が嫌いなのです。だから、みじめなのです。辛いということは、思い返すことではありません。昨日が辛いとか、明日が辛いとかじゃなくて、今自分が生きているから辛いんです。一瞬一瞬、その存在していると思うことに対して思うことです。誰かが私に“人生を楽しむことを覚えなきゃだめだぞ”と教えてくれました。Danさん（大郷博さんのことです）もそのとおりの人で、“あぶらむ”という“夢”を持って人生を楽しんでいます。けれど私は……なんの夢も希望もなく、どう人生を楽しんだらいいのかわからず、何をしたらいいのかわからず……。バカみたいなことですが、どうやって生きていったらいいのかわからない私から今までの見栄やプライドを切り取ってしまったら、それこそ生きることさえできなくて……。一切を捨ててしまった私が、人生をやり直そうと思い直すにはあまりにもみじめな日々でした。けれど、あぶらむと月日は私を少しずつ変えてくれたことも事実です。それこそ、見栄や外見のないありのままの自分がいたからこそ、また生き直してみようと思いはじめたのかもしれない。

あぶらむに居た5月6日まで精神的に辛かったことも多かったのですが、楽しいことも多々ありました。深い雪の中の雪降ろしは、屋根の上から飛び降りたらさぞ気持ち良いだろうという気分私をさせ、額に汗を流しながら懸命に雪を降ろし続け……



雪が溶け始めると宿の全景が見え始め、これがあぶらむなのかと、今まで雪にうずもれてわからなかったところが見え始めました。

何もわからなかった宿が雪溶けでその姿を現わすように、私の心も溶かしてくれたようです。Danさんの大仕事、教会家具の仕上げもほんの少しだけ手伝いました。「愛情が足りない!!」と言われながら、フィニッシュを塗り続け、納品の時はさすがに嬉しく、誇らしく、みんなにこの家具を見てもらいたいと自慢したく……そんな気分も味わいました。

春ともなれば、週末には宿の利用客も増え、Danさんのお友達も大勢みえました。忙しいけれど、その接待さえも嬉しく、後片づけは大変でしたが、みなさんが「おいしい」と言ってくれるということは、やりがいのあるものでした。時々趣味で焼くケーキは失敗作もあったのに、子供達は「おいしいよ……」と食べてくれ、何とも申し訳なくて……「今度こそ!!」とは思いますが、どうも失敗作のほうが多かったようです。何にせよ子供と一緒に生活というものは、ある一つの生活のハリであり、楽しさでした。子供がいなかったらどんなに寂しく、悲しい生活でしょう。(私は自分の両親にそれをしていのですが) そんなことも、ここでの生活は気づかせてくれました。奥さんをみんなでお母さん……あのね聞いてよ……」と取り合っている姿のそんな一つ一つが、私に私の家庭では過ぎ去ってしまった昔の楽しかったことを思い出させてくれました。そして、会話するということの大切さを思い知らされました。両親に自分から挨拶することもなく、ほとんど会話しようとしないう、必要最低限しかしゃべらない娘、両親はまるで私をハレもののように扱って……大人の顔をした大きな子供、それが私でした。子供である自分を認めながら脱皮できない自分が辛く、どうしたらいいのかわからず過ごしてきてしまった日々、雪溶けは私をせかしているようにさえ思いました。

あぶらむは、私にとって最初はまず逃げ場所でした。けれど、いつまでもそう逃げればかりいる訳にはいきません。確かに、あぶらむは疲れた心を癒してくれました。けれど、今の自分はあぶらむに長居してはきっとダメなのです。ずっと居たいと思うのは、それが自分にとって楽だからです。すべてを捨ててしまった私にとって、居心地がいいからです。けれど、本当の自分の場所は、“あぶらむではない”ということです。もう少し時間が経って大人の自分に戻れた時、もしかしたら“あぶらむは自分の場所”になるかもしれませんが、とりあえず疲れた心を癒した私は、飛び立たなくてははいけません。本当の自分の場所、それがどこか私にはまだわかりません。これから探していこうと思っているのです。人生を楽しむことをこれから覚えようと思っているのです。そのために私は、本当の大人になるために“遍路の道”を選

びました。この旅は、もう一度初めから生き直す道です。逃げてきてしまった私の最後の帰り道です。どこへ帰りたいのかまだわかりませんが、この旅の終える頃には生きる自信をもつことでしょう。そのための旅です。生きる自信がつけば、それから何かを探せばいい。探すことに疲れたら、あぶらむに行けばいい……。だって生きることに疲れたのではないから……。

宗教が異っていて申し訳ないのですが、けれど思うのです。結局は、神様へ通じる道はみんな一緒です。“遍路とは歩くことなり”とはよく言ったもので、足を引きずり引きずり歩いていると自分の弱さを思い知り、そして人のあたたかさを実感することができます。そして、あぶらむはそれを形にしたものです。あぶらむで生まれ、やっと今飛び立つ元気が出た私がそうであるように、そのことを大勢のみなさまに知っていただきたく思います。誰もが人生の良き旅人です。そしてあぶらむは、そんな旅人を優しく迎え入れてくれます。辛くとも一歩そしてまた一歩と歩ける自分がある。誰もがそうであることを教えてくれる遍路とあぶらむは似ています。

私にとって長いようで短い2ヶ月半という月日は、一つの分岐点でもあります。多くのみなさまと知り会えたことを感謝し、私を受け入れて下さったみなさまに感謝し、新たに生きる元気を与えて下さったことを感謝します。

Danさん、奥さん、そして子供達……あぶらむの時間をどうもありがとうございます。またいつか、あぶらむに還ってきます……。

五月晴れの中、たくさんの鯉のぼりが気持ち良さそうに泳いでいたことを思いだしながら、一生懸命歩んでいきます。

1991年5月15日 遍路にて

お待ちしております



飛騨の夏は涼しく、水と緑そして満天の星空が、
疲れた心と身体を、芯から休ませてくれます。

収容人員 30~40人

宿泊代 1泊2食付 大人6,500円 小学生以下半額

お問い合わせは、057772-4219 あぶらむの宿まで

後援会事務局だより

日頃、「あぶらむの里建設募金」にご協力いただき誠にありがとうございます。

昨年11月末に念願の“あぶらむの宿”が完成し、半年が経ちました。長い長い冬が過ぎ、あぶらむの里にもようやく春が訪れました。そして春の訪れとともに、U君と長尾恵子さんの二人があぶらむでの生活を終え、旅立っていきました。

私は、あぶらむの会后援会事務局という役割柄、多くの方々にあぶらむの会の働きについて尋ねられます。その度に、「一言では説明できないので、30分程時間をいただけますか」と聞き返し、大丈夫だということであれば、大郷先生がこれまで歩いて来られた道のりと現在の活動についてお話しします。話し終えるといつも、あぶらむの働きを言葉にして伝えることはむずかしいなあと感じています。

今号に、長期滞在者であった長尾恵子さんに原稿を寄せていただきました。皆様の中にも私と同様の感想をお持ちになられた方が多くいらっしゃるかと思います。そこには、長尾さんの体験を通してあぶらむの働きが見事なまでに表現されています。原稿を寄せて下さった長尾さんに心から感謝の言葉を贈りたいと思います。本当にありがとうございました。

一方、大郷先生の飛騨だよりの中でも触れられていましたが、U君との別れはとても辛いものだったようです。これもまたあぶらむの現実です。U君にも原稿をお願いしたかったのですが、今はまだその時ではないようです。いつの日か、彼にあぶらむでの体験を言葉にすることの出来る日が訪れることを祈っています。

それにしても、見ず知らずの他人を家族の一員として暖かく迎え入れ、共に生活をなさっている大郷一家の働きにはただただ頭が下がる思いで一杯です。

宿が完成し、受け入れ態勢が整った今、これからのあぶらむの会の課題の1つは、法人格を取得し、社団法人として公益のために活動を広げていくことです。現在、その準備作業を進めています。法人格取得の目途が立ちましたら、詳しく皆様にご報告いたしますが、多くの方々に会員登録いただき、会費および寄付、事業収入などを活動資金とし、会員による総会で毎年事業を決定し運営していくことを考えています。

それまでの間は、これまでどおり皆様からの募金とあぶらむ債を、宿建設に要した費用の残額およそ350万円の支払に当てたいと思いますので、今一度、皆様のご協力とご支援を賜わりたく、心よりお願い申し上げます。(事務局 西田)

5月31日現在の募金ならびにあぶらむ債の申し込み総額は以下の通りです。

募金申し込み総額 34,497,820円

あぶらむ債(1口10万円、5年間借用、無利子) 23,100,000円

※送金先 (募金・あぶらむ債共通)

郵便振替 東京7-255427 あぶらむの会后援会

○5月31日現在の募金申し込み者(順不同・敬称略5月31日以降の方は次号にて)

阿部潮音 武井秀雄・侑代 岡登正子 木村晃男 水谷満 倉敷英子 押田修実 中山弘・智子 菊地栄三 中島弘一 神戸聖ペテロ教会 木島出 石井秀夫 伊東秀称 桂英隆 長谷川牧子 平岡眞 祈りの家教会 高崎健一・由理 藤原芳行 鋤柄不二子 松岡和夫 小林和枝 高瀬留美 川崎米子 木村志津子 大澤浅香 久保真理子 百井幸子 萩野登 村岡明 谷昌二 福山清蔵 水口礼治 島田晴子 矢部直美 磯貝登美子 日本聖公会東京教区事務所 阿久津富男 中村洋 牛腸とも 名古屋学院大学宗教部委員会 具志堅興永 大杉匡弘 成井恵 菊澤満喜子 森田トミ 村山知子 野崎久子 黒井ミヤ 吉河佳代子 河村博之 聖マッティア子供の家 紀雅広 高野美知子 間島章雄・和子 池田一徳 藤田富雄 高坂征男 荒井優仁・彩月 猿田長春 沢田京子 吉田修 等農光人 萩原康宏 村守恵子 鈴木康邦 山本淑子 佐々木庸 小出一博 田場川陽子 山田益男 寺本康郎 辻真理 味岡敏江 根岸亜麗朱 占部いすず 金森裕子 浅見多佳子 平林隆治 徳田その 糟谷珠子 藤倉待子 関田寛雄 形部賢 瀬川信子 木田献一 鍋木静 平野幸男 所一彦 目白聖公会 紅林みつ子 戸田三三冬 京都復活教会 竹田純郎 池袋聖公会婦人会 松居勲 千葉復活教会 下田英一・由香 久世治靖 加納厚・美津子 北山和民 岡本伸之 村山千栄子 木田市治 三原達也 轟アヤ子 逸見操 松本信代 上林由利 黒瀬禮子 山野繁子 石川眞安 高島光江・富美江 萱間隆夫 米田由紀 大橋秀行 大城恵子 入川ヨシ 永田ナエ 山城タケ 大嶺佐智子 山城キク 嘉手刈米子 富田徹 早瀬隆司 竹内寛 高野アサノ 掛川尚子 神島洋二 嘉数弘子 宮城タケ 知念ハル 大城つる 第40回立高SPF実行委員会 岩間光雄 長間四郎 川上詩朗・美砂 須貝千世子 二宮ノブ 山本継彌 チトワン総合農業開発計画佐藤寛君をネパールへの会 奥山広子 立教女学院 葛飾茨十字教会 馬場康弘 園部勝 友愛奉仕団 名取麻子 谷市三 山田美智子 片岡剛 小久保純一 廣瀬康夫 遠藤恵子 セントポールライオンズクラブ 朝比奈誼 筒井啓子 新倉俊吾・久乃 大坪秀夫 野村宗美 川上廣之 木戸協進 瀧上治 倉坪和明 北村善治 竹原廣行 原口敦子 丸井久枝 宮本冬子 森井英子 富山聖マリア教会婦人会 坂本吉弘 桃山学院 卒業生一同 岡田賛三 佐々木国夫 村上健治 津田弘子 鳥光賢太郎 丸山知子 布施勇次郎 東璋晃子 菅野和子

○5月31日現在のあぶらむ債の申し込み者(順不同・敬称略5月31日以降の方は次号にて)

三浦一雄 佐藤一宏 安西勇夫 松島理恵 渡辺直明 上田敏明 オザキカズヒロ 竹味登志子 倉辻明男 高橋清子 武中英夫 園部秀穂・直子 木島昇 渡辺隆 水戸部賀津子 紅林みつ子 溝際庸介 中山弘